

「衣かせ山」考

佐伯仁三郎

一

古今和歌集、巻第九の羈旅、「よみ人しらず」
宮こいでてけふみかの原泉川かは風さむし衣かせ山

(古今巻九、四〇八)

の歌は土地の固有名詞三つを重ねている処から古来の道行振の風を
伝え、歌形からは三句の体言切、五句の体言止という風変りなもの
で、このことから「謡い物」系統といわれる条件を具えている。
その他愚案によれば地名の掛詞が三つ、序と見るべき詞が一つとい
う技巧本位のものではあるが、それでいて何となく古雅な趣もあつ
て愛唱されたものと思われる。ところがこの歌について古来の註は
必ずしもそういう処を重くは見なかつたようである。

余材抄(契沖)が、「京を出てけふみかといふ心につづけたり。
伊勢物語に業平の『なにはづをけふこそみつの浦ごとと』とよまれ
たるつづきに同じ。都を出て今日三日になるといふ心につづけるに
あらず。」と言ひ、特に末尾の語は頭昭本その他に麁(三日)とあ
るのに対していったもので、もとより京を出ての行程を三日とする
ことの不合理に具えているのである。打聽(真淵)も之を肯定して

「今日三日と見るべからず」と断わり、遠鏡(宣長)も「みかの原」
の掛詞を見と取って、それは「鹿背山を見る」の意だとする無理を
冒そうとした。之に対して始めて反論を試みたのは例によつて香川
景樹であった。正義はいう。

「京出てけふといふまでは麁とはいはん枕なり。旅する人は都出
て今日幾日とかぞふるが常なる其詞をかりて、麁を三日四日の三
日にかけてたる也。旅の歌に旅の語を用ひたればやがて旅の心によ
りて枕なる事を思はざるより、諸註とき惑へり。」

之によれば旅で日数をいうに「三日四日」という詞を使う。その
「三日」だという。即ち旅に關係ある詞を用いて旅の暗示を強めて
いるのだ、と言うのである。そして余材抄のいうように見るの意を
みかと言へるか。伊勢物語のは「けふこそみつ」即ち美津まで掛る
のだから不足はない。又今日此所を見たというのは河風の寒さを作
るといふには似合わしくない。本来相応しないものだ——と言つた
のは寧ろ道理であつた。之によつて「けふみか」は今日三日で、そ
こまで「京出でて」の初句にかかるといふ。金子元臣氏の評釈はこ
れを継いで、契沖、真淵、宣長の三者には従うべからずとし、「都
を出て何かの事情で、旅路に三日ばかり費して麁原に來たと見える。

乃ち三日に婁原をかけた。既に万葉集に三日原の文字も見える」としている。これは

三日原 ミカノハラ 布当乃野辺 フツキノノベ 清見社 キヨミノミヤ 大宮処 オホミヤノコロ 定異等籍 サダメイナラシメ

(万葉卷六、一〇五一)

を指すものである。

併し之に次ぐ窪田空穂先生の評釈は之を痛烈に駁し、再び契沖ら三者の原案を支持せられる。

「旅であるが都から一日の行程ほどの所で、殊に婁原、いづみ川、鹿背山など、旧都の關係から名所になってゐる所であるから、作者は佗しさをいはず、興をいってゐるものである。『今日みかの原いづみ川』は憶れてゐる所を初めて見る躍つた気分に見える調べである。『今日みかの原』の懸詞は躍つた心と、それにふさはしいテンポの早さを求めた言ひ方である。『みかの原』と『いづみ川』との続きは、事としては『みかの原のいづみ川』ではあるが、心としては文字通りのもので、そこに躍つた心がみられるのである。転じて『川風さむし』と、そこに至つて初めて予想外な物を認めた事をいってゐるが、直ちに『衣かせ山』と、又名所に言ひ懸けてゐるのは、一に心を躍らしての興である。軽い旅愁である。歌の一面にある道行きに近いもので、謡ひものの匂ひを多分に持つてゐるものである。謡ひものでなかつたにもせよ、その影響は受けてゐる歌である。川風の寒さは都を出た日の夕方のものであらう。すべてが実際に即してゐる上から見えてさう取れる。」

とされ、前出の三者が「けふ三日の原」を認めない理由は三日が都からの行程でなく、その上三日はこの歌の中では解釈の出来ない詞

となる、即ち歌以外のものになる——とせられてゐる。これは今日の瓶原が京都からの歩行でどのように遠廻りしても一日行程が常識をなしていることを論拠とされる。又、景樹の「『都いでて』がみの一首にだけ懸るのではこの場合不足感があり、下旬の『川風寒し』が唐突になる」といったのを難じ、懸詞は序に近いもので心が通りさえすればよく、仮に不足だとしても「都いでて」を意味の上では認めない解よりも遙かに優つてゐる。唐突説も一首の作意を解さないものだ——と主張されるのである。そしてこの歌の通釈を「都を旅び」として出て、今日見る瓶の原、そのこの泉川、川風が寒い、衣を貸せよ、それを名持った鹿背山よ。」とされている。これに次いで岩波・古典大系本（佐伯梅友氏）頭註は簡単に評釈（窪田）を踏襲してゐる。

二

さて、古註、新註がこうした論駁を繰返すこの歌は、古今集羈旅の部にあつて、その巻頭の第一首には

安倍 仲 磨

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
第二首には

小野たかむら朝臣

わたの原やそ鳥かけてこき出でぬと人にはつげよあまの釣舟
そして第三首が本題歌となる。本題歌に続けては第四首目に

はのぼのと明石の浦の朝霧に鳥がくれ行く船をしぞ思ふ

と続けられるのであるが、これら前後の三首は背景にそれぞれ伝説的、説話的な趣をもつもので、多く悲歌の趣旨を添わせてゐる。し

かし悲歌としての趣向は一定してはいない。第一首「天の原」を望郷とでもするなら、第二首は極めて現実感ある哀別であり、第四首の「ほのぼのと」は驟然たる古代の旅愁だったかもしれない。境涯を旅情におく一連の悲愁歌であつて、そこに和歌配列上の主旨があると見られようか。今日いう単なる旅中詠、旅行の見聞に終つていようなものは一首として此巻にはなく、いわば羈旅の名は抒情の主題ではなくただ形式たるに止どまつているのである。本題歌が単に旅中詠だと見る根拠はどうやら薄弱となるのであつて、他の作歌同様に何等かのペーソスがあるか、ユーモアであつたにしても、どこかに悲歌の趣を副えたものが無くては協わぬ順序となる。勅撰集の配列が何らか一定の趣意があつて、漫然雑然たるものでないことは周知の通りである。古註は上述の如く何れもその点を見落している。旅を躍つた心で詠んだものと言ひ、名所自慢の道行振で精々調べの面白さをいうのだとして、この歌がもつ古い雅致の根源にさえ、言い及んだものが無かつた。本歌題は果してそのようなものだったらうか。単に謡い物としての風俗歌であつたか、それならそれで古歌の伝統の踏まえられた何かがあるのが通例である。この歌の場合だと精々夥多な修辭的效果が問題になるだけであらう。古今集編者の意向がそのような処にだけあつたとは思えない。

さて、今この歌を改めて地理的に見てゆくと、歌の背景としての木津川流域地方、特に木津、加茂を頂点とする大きい河川の彎曲部は、曾て応神記に歌われた「千葉の葛野」であつて、いわゆる先行國讚歌の残された土地であつた。片田舎だった山城人よりも当時は大和の宮廷人達がこの地を憧れ愛したであらう。和銅年中、元明天皇が此処に離宮を営まれたが、聖武天皇は最も此処の風光明媚を愛

せられて御即位前から行啓があつたという。その故にこそ御即位翌年の神龜二年には初度の行幸があり、改元後の天平十三年（奈良朝に入つての三十年後）に宮室の位置が一時此地に移り、恭仁（久邇）京と称される。そのまた三年後、天平十六年には何故か天皇は一時皇居を難波宮に遷され、溜まること一年にして翌十七年には又も宮廷は恭仁に近い山城の信樂京（恭仁の北方、淡海寄り）に奠められたという。僅か数年のうちに遷都が三度行なわれたことになる。この原因は歴史家を多忙ならしめていようであるが、ともかくその後間もなく四度目の遷都で、天皇は元の寧樂京へ帰還されるというあわたしきさだつたのである。大体このような歴史からみて、斐原、泉川、久邇等の地名には、古代に遡るほど風光明媚の別天地としてのそれよりも、どうやら人間情緒、人間の欲念の香を副わせたように思える。政争上の事柄は暫く措くとして、万葉集はその間に次のような極めて濃厚な人間的情感の片影を伝えているのである。

三

神龜二年聖武天皇の行幸に陪従した笠金村には有名な次の長歌と短歌があつた。

（神龜）二年乙丑春三月、三香原離宮に幸しし時、娘子を得て
 作れる歌一首并に短歌 笠朝臣金村
 三香の原 旅の宿りに 玉ほこの 道の行合に 天雲の 外のみ
 見つつ 言問はむ 縁の無ければ 情のみ むせつつあるに 天
 地の 神祇ことよせて したたへの 衣手易へて 自妻と たの
 める今夜 秋の夜の 百夜の長さ ありこそぬかも

（万巻四・〇五四六）

反 歌

天雲の外に見しより吾妹子に心も身さへ縁りにしものを(五四七)
今夜の早く明くればすべを無み秋の百夜を願ひつるかも(五四八)

この一聯は右註に記された通り離宮時代の三香原で金村は行幸に従駕しつつ、男女両性の関係には全く自由な時代だったとは言え公式の旅で、しかも朝臣の姓(かばね)をもつ者が、天皇の側近で麗々しく道で逢った遊行婦女らしい女性と懇ろにしている歌を詠むとは何事かと、先ず一往は苦笑もされようが、恐らくはこっそりと手記されて残ったものが、後に万葉編纂者の手に入ったという順序でもあったろう。むしろ時代の伸びやかさが思いやられて羨しい。大意をいえば「蕪原に旅で来たが、道でちらりと見かけた美しい女が、到底手の届かないものと思い、話しかける由縁も折もないので心を躍らしていたのに、幸いに天神地祇のおかげを蒙り、衣を掛け易え共寝の出来る妻にすることが出来たと夢中でいる今宵なのだから、短いものという春の夜だが、あの長い秋の夜を無数に繋げたほどの長い夜であってほしいものだ」というのであって、作者は正に得意の絶頂にいたのである。二首の短歌に辞義通り反歌であって、長歌の意を別な詞で簡潔に言い易えたに過ぎない。ところで茲に歌詞の中にある

敷細乃衣手易而自妻跡憑有今夜

という五七の二句は、相手の女との共寝を例の具象的に表現したもので、いわば同衾の方法をいったものと二、三の註はいう。「衣手易而」は「袖をさし交わして」の意とするのも多いが、卷十一の譬喩歌の中にも

衣霜多在南取易著者也

(二八二九)

梓弓束卷易

(二八三〇)

等の用例もあって易字は必ずしも交字の義とは決め難いであろう。これは寧ろ上代から中古にかけて残存した風儀、即ち女性側の上衣を脱いで仰臥した上から掛けることをいうと考えるべきではないであろうか。そうなら男性からいえば女性にその袖を借りることであり、双方にとって袖を易えることになる。女性側の袖を借りるのは上衣が広く長かったからで、これは今日でも和服はそれに近い。従って衣手を借ることがやがて「つまどひ」を意味したことも当然であろう。そうでなければ第十四巻の東歌中に含まれた相聞歌には釈し得ないものが出るわけである。

筑波の新桑蚕の衣はあれど君がみ衣しあやに著ほしも(三三五〇)
他妻と何か其をいはむしからばか隣の衣を借りて著なほも

(三四七二)

たくぶすま白山風の寝なへども子ろが襲着のあろこそ善しも

(三五〇九)

第一首の下旬が相聞歌となる鍵は正に四五句にあって、それが無いなら一首は殆ど意味を成さないであろう。第二首以下は何れも相聞歌中にある歌で、衾中のいさかいを借衣にかけていうもの、共寝しない寒さの中で衣だけをかけてその衣の持主を唄んでいるという纏綿たる情緒であって、これらはすべて焦点が女性の衣そのものになり、且つ事実として丈の長く広いその上衣にあったことも言うを要しないことであろう。

これらは「つまどひ」の語の上代における一つの様式化であって、やがて極く普遍化し通例化したことと思われる。天平前朝、天武天

皇の次子高市皇子の子といわれる長屋王（みけのみやまぎ）は、市村宏氏の論述によれば当時の万葉歌風に一転回を齎（あづか）らした所謂作宝楼サロンの中心人物であつて、万葉の歌風に中国詩文の風雅調を取入れた第一人者だつたといわれる。万葉の素朴雄渾が、当時の国際調ともいふべき博雅な芸趣味の色調を添（そ）わしめたという考証は貴重な意見であつたが、その長屋王には旅中相聞と見られる左の一首があつた。

宇治間山 朝風寒之 旅爾師手 衣心借 妹毛有勿久爾

(万巻一・七五)

この宇治間山は大和の吉野であるが、旅中の王が家なる妻を憶つての作という風に諸註は釈くようである。それは極く無難でもあろうが、市村博士の言われるようにこの歌は確かに作り物の観はあり乍ら、そこに一味の雅致を漂（よ）わす処もなしとしないこと正にその通りである。それにつけて思われるのは四、五句にいわれている「衣借すべき妹もあらずに」の語である。これが前説述べ来た「つまどひ」表現の、当時における語感的帰結をも暗示しているのであつて、妹が妻であらうと無（な）かろうと殆ど論ずる処のない、いわば女性一般として取ることの許される雅味を蔵するものとして解しても良からうか。これは直接には前出笠金村作歌のそれと明瞭に対照し得るものであらう。

下衣の衣が上古に於ては男女共通に用いられる作りようだつたとする通例の解法では、旅に出られた王が京の妻を偲（おも）ひ、折からの寒い朝風に旅中の孤独を嘆くものとして、「衣心借」を「朝風寒之」の偶然性に対する触感を主体とする。しかし妹を単に一個人の家妻として王の人間性の健全さを自証したもののよう（よう）に解することのみが、当時の風流人としての王を解する所以にはならないかも知れない。

い。女性を「衣借すべき」ものとする従来の伝統は茲に文芸的品位が添えられ、普遍化の姿をもつに至つたものとして、サロンでの喝采を博されたのではなかつたらうか。それが特殊なる風流人長屋王その人を解する方法でもあらうと思われるのである。(市村宏氏論文・「万葉集と長屋王」参照)

四

何れにしても「衣借す」にはこのような伝統の流れがあつた。そして古い広い地域に不文律としての風流味を形作つていたと考えてよからうか。直ちにそれが肉感に迫るようなものではなく、当時は寧ろ当然の挨拶程度のものであつたであらう。そうした流れを汲み取つていつとはなく甕原の歌にも恰好な所自慢、道行振の資料となる「鹿背山」が取上げられる。本歌題の「衣借せ山」は正にそれであつて、当時この地方では常識的のものであり、こう言えば恐らくは一座のもののみならずい哄笑を誘つたであらう。この歌に対する諸註が鹿背山におく掛詞のめづらしさを説くのみで終つているのは残念という外はなく、一歩進んで以上の事が言わねばならぬ。故地旧京に此の種の伝統の残るのは決して甕原に限らない。此処のすぐ近くには曾て記に謡われた志賀の駅路八幡（はちま）があり「ヤハタヲトメ」が天皇の旅愁を慰めた。前出笠金村歌は何よりもこの地での立派な先例を示すものであつた。それからあらぬか中古における三十六歌仙の一人、中納言藤原兼輔として古今六帖に取られている

みかの原わきて流るる泉川いつみきとてか恋しかるらむ

もある位である。これが兼輔集に見えないのも不審であるが、藤原定家と同家隆とによつて新古今集はこれを入集し(九九六)、特に

定家は百人一首に選出した程氣に入っていたようである。これも明らかに土地柄を踏んだ相聞歌であった事分明である。序で乍ら此の歌では「わきて流るる」が泉についての縁語としても解すべきで、「土地を二分する」の掛詞「分きて」ではなく「湧きて」であろう。これは「いづみ川」関係の修辭的用例では万葉集卷九にも

妹が門入り出づみ(泉)川常滑(とこま)にみ雪残れりいまだ冬かも

(一六九五)

があつて、これまた相聞歌だったこと、前出歌と同様土地柄から来たことを示している。

五

さて、こうして見て来ると、古今集羈旅歌が冒歌二首の悲歌に続けて三首目に本題歌をおいた因縁も略々察せられそうな気がするのである。本題歌の根底は当時の受取り方としては正に「逢はぬ恋」のそれであり、そこに道行振に副寄せた独特な微笑が入り混じる。編者はこれを買ったのであろう。羈旅歌に撰ばれた資格は正にこれであった。「逢へざる恋」であるから「川風寒し」は寂しさの言い換えとわかる。これを「誦いもの」系統のものと見られた空穂評釈の心に沿って通釈を試みるなら、凡そ次のようにも書き替えられようか。

宮こいででけふみかの原泉川かは風さむし衣かせ山

通 釈

都を発つてそこ此所と、尋ね歩いた三日の原よ、いつみる泉というではないが、襟につめた川風だ。おおい……名に負う鹿脊山よ、衣貸してはくれまいか(あの人の衣をね)。

戯れ歌の調子を愛し乍ら、ユーモラスな苦汁を汲みとったのが同時代、同所における心であつたと見たのである。

なお、この歌の「京」を山城京でなく「大和京」から北行したものと考える見方もある。しかしそうすると低山地帯ながら路は山越えをつづけることになり、出れば眼下はすぐ木津であつて「けふ三日原」もひどく近間過ぎ、何か無粋で不自然となる。もとより地形は多少今日とは違つたであろうが、山地をさまよつて川の一角に出るにも恐らく半日の余であらう。可能ではあつても羈旅の趣に遠退くことにならないか。この「京」は古註以来の想定に従うべきである。

(昭三九・五)

(三十四頁よりつづき)

人麻呂』山本健吉氏によつた。なお西郷信綱氏『万葉私記

第三部』・『日本古代文学史改稿版』参照

注 9 『柿本人麻呂』山本健吉氏

注 19 注 8 の西郷氏前掲書

注 11 拙稿「人麻呂と持統朝二」『文芸と批評第四号』昭和三十

九年七月発行、参照